

児童一人一人の「心の居場所」となる学級づくりの工夫

～不登校を予防する人間関係作りを通して～

志真志小学校教諭 島袋 伸

目 次

I	テーマ設定の理由	47
II	研究目標	47
III	研究仮説	47
IV	研究の全体構想図	48
V	研究内容	49
1	心の居場所とは	49
(1)	心の居場所となる学校	49
(2)	心の居場所となる学級	49
2	不登校を予防するよりよい人間関係づくり	50
(1)	児童理解	50
(2)	早期発見	50
(3)	不登校児童早期発見の初期対応	51
(4)	学級担任による教育相談	51
(5)	支援シートの作成	53
3	よりよい人間関係について	53
(1)	児童と児童	53
(2)	教師と児童	53
(3)	Q-Uアンケートについて	53
4	構成的グループエンカウンターとソーシャルスキル教育について	54
(1)	構成的グループエンカウンターについて	54
(2)	SGEの基本的な流れ	55
(3)	ソーシャルスキル教育について	55
(4)	ソーシャルスキルの流れ	55
(5)	ソーシャルスキルの種類	56
VI	構成的グループエンカウンターとソーシャルスキルの実践	56
1	児童の実態	56
2	指導計画	57
3	これまでの授業内容と感想	57
VII	授業実践	58
1	題材名	58
2	題材設定の理由	58
3	ねらい	58
4	授業仮説	58
5	本時の展開	59
VIII	結果と考察	60
1	授業の流れ	60
2	児童の感想から	62
3	授業研究会の記録	63
4	検証授業後のQ-Uアンケートと学級生活意欲尺度の結果	63
IX	研究の成果と課題	64
	<主な引用文献・参考文献>	64
	<支援シート>	65

児童一人一人の「心の居場所」となる学級づくりの工夫

—不登校を予防する人間関係作りを通して—

志真志小学校 教諭 島袋 伸

I テーマ設定の理由

目まぐるしく変化していく社会の中で、子ども達は日々生活している。物質的にも豊かになってはいるが、逆に、心の貧困さが叫ばれている。そのような状況の中で、ストレスを感じたり、不安を感じたりして一日を過ごしている子もいる。核家族化・少子化など家族の形態も変わり、地域での体験不足や学校での友人関係や異年齢者との交流不足から人間関係が希薄化し、友達との付き合い方や耐性力の低い子が増えている現状である。

学校でのいじめ・不登校など、人間関係をめぐる問題、少年犯罪の増加、犯罪の低年齢化、家庭内暴力等の多種多様な問題の原因の一つとして「心の荒廃」があげられる。今、教育改革によって学校現場には、「心の教育」、「生きる力」の充実が叫ばれ、これまでの学校教育が大きく変わろうとしている。

ところで、文部科学省⁽¹⁾の『今後の不登校の在り方について』の報告によると、「学校は児童生徒にとって、自己の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる『心の居場所』として、さらに、共同の活動を通して社会性を身につける場として、十分に機能する魅力ある学校を目指すことである」と述べている。このことからひるがえって、学校生活のホームベースである学級でも同様なことがいえる。一人一人の個性が発揮できる集団や子ども同士がお互いの存在を認めあえる集団こそが、よりよい人間関係を確立するうえで必要であると考えられる。

しかし、実際、教室の中にいる子ども達は、人間関係作りが苦手な子が増えている。そのことから、現在増加している「不登校」や「引きこもり」、「いじめ」などのさまざまな事柄も人間関係のコミュニケーションスキルの不足が誘

因のひとつであると考えられている。これまで、不登校児童の対応は事後の指導に回ることが多かったが、これからの方策としては、不登校までにいたってはいいがその可能性の高い周辺児たちを早期発見し、予防していくことが必要になってくると思われる。そのためには、学級でのよりよい人間関係作りの機会や集団づくりが効果的である。

教師自らが子どもを一人の人間としてとらえ、よさや可能性を見つけていこうとする心構えが大切であり、よりよい人間関係作りのためには、教師と子どもとの信頼関係づくり、子ども同士の人間関係づくりが必要だと考える。

構成的グループエンカウンター（以下SGEとする）に着目し、授業実践の方策として取り入れることが望ましいと考える。SGEは、自己受容や他者理解などのねらいを持った体験活動を行い、それに伴う感情や気づきを通して、お互いのよさを認めあえる好ましい人間関係の確立をめざす集団活動の一つである。また、子ども理解のために、Q-Uアンケート⁽²⁾を実施し、本研究に生かしていきたい。さらに、周辺児に対しては、その子を理解するためのマニュアル、支援シートの作成することが必要であり、その子に合った指導・支援を担任一人だけでなく、学校での支援体制づくりが必要である。

以上のことから本テーマを設定した。

II 研究目標

子ども一人ひとりに学級の所属感を持たせ、よりよい人間関係作りをする。

III 研究仮説

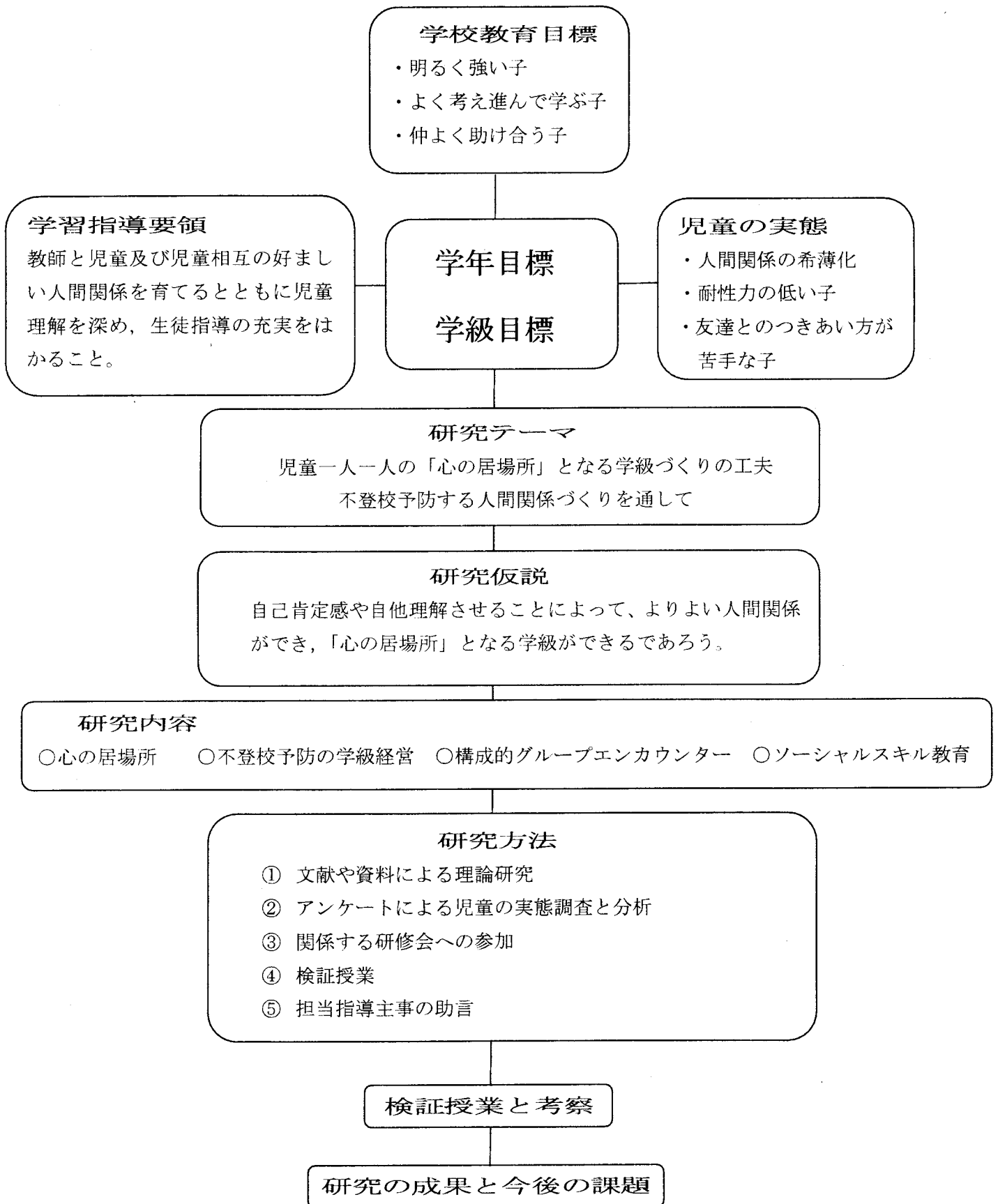
自己肯定感や自他理解させることによって、よりよい人間関係ができ、「心の居場所」となる学級ができるであろう。

(1)

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/houdou/index.htm

(2) 楽しい学校生活を送るためのアンケート 図書文化

IV 研究の全体構想図



V 研究内容

～ 心の居場所 ～

1 心の居場所とは

心の居場所の定義について、文部科学省の報告では、児童生徒にとって、自己が大事にされている、認められているなどの存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる場所といわれている。

(1) 心の居場所となる学校

松原達哉氏^③によると、子どもは学校が自分の居場所であると自覚できると、自分を自由に表現できる。学校は子どもにとって「心の居場所」であり、学校生活の中で存在感を持ち、自己実現の喜びを実感できる場でなければならない。「心の居場所」としての学校では、学校の組織や教職員の子どもへのかかわり方として、以下の三つをあげている。

第一は、教職員の個性が尊重され、個々の教職員のよさが子どもとのかかわりに最大限引き出されている学校である。教職員の個性が教育活動でいきいきと機能し、子どもとの理解と指導に生かされることである。

第二は、教職員の円滑な人間関係である。個々の教職員の専門性や資質を互いに認め、協力し、組織として教育活動を充実させることである。研修により資質を向上させ、校内研究を充実させて、日常の教育活動において学校が「心の居場所」へと変わることが求められている。

第三は、教職員が子どもから学び、自己変革することである。学校や教職員に子どもを適応させるのでなく、子どもが適応できるような広い視野や深い心で人間性を豊かにすることである。

また、組織としての子どもに学び、変革に勤めることにより、子どもは学校に適応し、自己指導力を高めるのである。

(2) 心の居場所となる学級

児童生徒が望ましい学級集団の一員として生活していくうえで、親和的・建設的・意欲的な

行動に向かわせる要因が必要である。その要因として次のことが挙げられる。それは、集団のメンバーである児童・生徒一人一人の間にあるリレーションが確立されていること。尚かつ、集団の一人一人が気持ちよく、そして意欲が建設的な行動として発揮できるような対人関係のマナーや集団の中でのルールが確立されていることである。つまり、学級集団内にリレーションとルールが両立していなくてはならないのである。リレーションは親和的な本音の感情交流であると、集団内の人間関係は良好になってくる。しかし、親しき仲にも礼儀がなければ、その関係は馴れ合いの度合いがまし、本音の言葉は人を傷つけるようになり、リレーション自体が壊れてしまうことがある。つまり、リレーションを維持していくにはルールが必要なのである。

ルールは対人関係や集団の規律を保ち、ルールが確立している集団では対人関係のトラブルはとてま少なくなってくる。しかし、ルールの意味が理解されてなかったり、厳しすぎると、その集団のメンバーはルールに縛られ、ぎすぎすしたものになり、メンバーはストレスや不満がたまってくる。そのストレスや不満の強さからルールに対する反発やルール違反が表われるようになってくる。要するに、ルールを維持していくにはリレーションが必要である。

このように、集団内にリレーションとルールが両立することで、本来の持ち味が生まれてくるのである。

そこで、学級での工夫として以下の取り組みが考えられるだろう。

○グループでの活動を増やす

【二人組から四人組などへと】

(子ども同士のリレーション作りのため)

○日頃の日記の交換や休み時間などでの会話

(教師と児童のリレーション作りのため)

○学級便りの発行

(教師と保護者のリレーション作りのため)

○学級懇談会での会話でのSGE

(親同士のリレーション作りのため)

③ 立正大学教授 日本カウンセリング学会常任理事

2 不登校を予防する よりよい人間関係づくり

不登校を予防する学級経営

(1) 児童理解

子どもの感情を自分の感情に移し変えてとらえることである。すなわち、共感的理解である。そのためには、じっくり聴くこと（傾聴）が大切である。児童理解は、まず相手の言うことを受け入れることから始まる。第二は、教師自身の自己開示をすることである。一般に、よい人間関係ができると自分自身のあるがままを表出できるようになる。また、相手に自己をさらけ出すことができるのは、相手に対して防衛的でなくなり、自己をきちんと理解し表出できるということであり、精神的に健康であることを示している。

また、子ども一人一人を深く理解する方法としては、学校生活の様子を観察する方法、子どもとの日常会話、子どもや親と面接する方法、子どもの作文や日記などを用いる方法、各種の心理検査、友人関係を調査する方法などさまざまある。また、ひとつの方法を検討することも可能だが、いくつかの方法を組み合わせたりして、より深く、多面的な視野から児童理解するために教師は多くの方法を用意しているほうがよいのである。

(2) 早期発見

不登校にはさまざまな様態があり、そのすべてについて完全に早期発見することは困難である。通常、早期発見の前提となるのは、学級担任の日常的な観察であるとされる。次の表は、不登校の発見のポイントとして、学校と家庭での子どもの行動についてまとめたものである。このような視点を持つことによって、不登校のいわばハイリスクグループを特定することができる。早期発見するためには、普段からハイリスクグループに注意を向けておくことや事がおこる前の初期症状を知っておくことがキーポイ

ントになってくる。例えば、日常的に行なわれる健康観察や出欠の調査により、原因不明や欠席が数日続いた場合は不登校の初期症状と考え、対応のための準備を考える必要がある。

※不登校早期発見の視点

学校では

- 友人の中に入るのが苦手
- おとなしい
- 休み時間などに教室でひっそりしている
- 少しのことでも気にする
- 生まじめできちんとしている
- 気が小さい
- 自身のないことには手を出さない
- 規制やきまりにとらわれる
- いつも宿題をきちんとやっつけていこうとする

家庭では

- 登校時間前にぐずぐずしてなかなか起きない
- 朝になると頭痛や腹痛を訴えるが、登校時間を過ぎるとそのようなことはない
-
- 登校時間前になると、いらいらして落ち着きがない
- 友人が迎えに来ると会いたがらなかったり、隠れてしまったりする
- 放課後や休日は元気
- 夜になると、翌日は登校する気分を見せる
- 欠席していても学習のことは気にする
- 外ではおとなしいが、家庭ではわがままである

(3) 不登校児童早期発見の初期対応

初期の段階では、家庭とのコミュニケーションを密にする必要がある。これは、子どもの状態を正確に把握できるだけでなく、保護者の不安を和らげるという意味合いも含んでいる。我が子が不登校になったとき、保護者は今までの自分の養育姿勢を責めたり、学校に原因を求めようと批判的な態度を取るなど、精神的に不安定になりがちである。そのようなときには、保護者と密に連絡を取って動揺を静め、今後どのような対応を取るべきか話し合おうとする態度を示すことが必要である。そうすることが、教師に対する信頼感を高め、その後の具体的な対応を考えていく場面でも、教師の指導が受けられやすくなるのである。また、学校側の対応が遅れたり適切でないと感じたとき、保護者は学校を強く批判する傾向がある(河合, 1991)。このような状態になってしまうと、それを解きほぐして話し合いの席につくのは非常に困難を伴うことがある。そのため、できるだけ欠席の始まった最初の数日に保護者と連絡を取るようにし、在宅時の様子や欠席に対する保護者の見方、学校に対する考え方について話し合っておくことが望ましいと考える。保護者と連絡が取れたら、次に話し合いの場を設定しなくてはならない。その際、話し合いの場として考えられるのが学校である。できるだけ子どもが同席した上で、現在の状況やこれからのことについて一緒に考えていこうという態度で臨みたい。学校で行う意味の一つは、子どもの状態が登校できないほど深刻なものではないということを保護者に伝えることである。もう一つは、不登校の問題が、保護者にとっても主体的に取り組むべきものであることを意識してもらうためである。

次の段階として、家庭訪問は、同僚など第三者によるアドバイスを求めてからでも遅くはないと考える。本人を含む家庭と学校との話し合いの場をいかに設定するかを工夫することが望ましい。話し合いの場ができて、初めて指導が

可能となるからである。

(4) 学級担任による教育相談

学級内における子どもの問題行動には、様々なことが考えられるが、ここでは、落ち着きがない、乱暴する、掃除をさぼる、友達がいない、ADHD児やLD児の傾向、欠席がちであるなど、日常ありふれたごく一般的な問題、いわゆる教師が指導上気になる行動について取り上げ、学級担任としてどう対処したらよいのか考えてみたい。

○行動が気になったら

どうしたらよいか

「教師の態度を明確にする」ことである。一般的に、事がおこると、その事のみにとられ、ややもすれば一方的に注意し追及する態度になり、叱責のみに走りがちである。直したいのは教師であり、子供にはその気持ちがない。これではいつまでも同じである。教師としては受容的、理解的な態度で接することが大切である。そうすることによって、真の原因が見えてくる。

○様子を見ること

観察する

- ① 注意する前に様子を見る。つまり、「観察する」ことである。
- ② 気のついたことを具体的にメモし、「記録する」ことである。
- ③ 「場を変えて観察する」
例えば、選科担当の教師に授業の様子を聞いたりする。

○話を聴くこと

自分で問題がわかってくる

- ① 子どもの様子を見てもなかなか気持ちがあつかめないときには、子どもと話し合ってみることも、尋問する態度ではなく、話を聴く、「面接」をすることである。
 - ② 次に、教師の考えを話してみる。
(相手の気持ちを聴いてから教師の意見を述べる。)
 - ③ 話し合う中で、子どもが自分を見つめられるようにする。
- ※問題を起こした子ども自身が、その原因について正しく理解することが問題解決の手がかりになる。したがって、本人に気づかせるように話し合いを進めるのがコツである。次の三点に留意すれば相手の気持ちに触れることができる。
- ◇ 子どもの立場に立って考える。
 - ◇ 子どもの感情を大切にすること。
 - ◇ 話し上手より、聴き上手になること。

順序だてる

○問題を整理すること

- ① 現在問題になっていることを具体的にまとめてみることである。
- ② その問題がいつ頃から気になり、どんな経過があったか、すなわち、問題の起始、経過を整理する。
- ※ 感情を交えず、問題をありのまま具体的に記録したものを整理することによって、問題の背景にある原因が自然に明らかになる。このことによって、その問題の特質などが明らかになり、その結果、自分の力で指導できるかどうかをなど、仮説を立てることができる。

○所見をまとめること

- ① 観察、面接の結果を整理し、問題の経過をまとめることによって、この問題について、担任としての所見を記述する。
- ② この所見を基にして、指導を考えてくことになる。(仮説を立てることになる)
- ③ 仮説を立証し、理解を深めるために資料を整理する。
- ※ 所見をまとめ、仮説を立てる段階においては、第一次的理解であるから、観察、面接によって得られた資料と既存の資料を参考として理解できたことをまとめることができる。

○調査、検査をすること

- ① 既存の資料だけで理解が不十分の場合には、更に必要な検査をする。
- ② 必要と思われる調査、検査を整理すると次のように分類できる。
 - (ア) 身体的、生理的な側面・・・身体的な欠陥はないか。出欠状況、保健室利用状況など。
 - (イ) 知的、学業的な側面・・・知能検査、学習適応検査、学習態度など。
 - (ウ) 性格、情緒的な側面・・・性格検査、問題行動の予測できる検査、悩み調査など。
 - (エ) 環境的な側面・・・親子関係、ソシオメトリックテストなど、家庭や学校の人間関係を主体とした環境。

※調査、検査で留意することは、検査のための、検査になってはいけないということ、そのためには、ねらいをはっきりとさせ、ねらいにあった検査を選ぶことである。次に検査の実施に当たっては、相手とのラポートをつくること。結果の処理については、ひとつの検査にとらわれることなく、観察結果と照合し、疑問があれば他の検査を実施し比較するなど、慎重にかかるべきである。

第一次理解

資料を整理すること

○指導方針を検討すること

- ① 事例について話し合う場を設け、指導の方法を具体的に話し合う。
- ② 参加するメンバーは、学級担任と学年の先生方を主体とする。できれば、養護教諭、教育相談係、教務主任なども加わって協議する。
- ③ 担任の所見と資料を参考とし、問題の理解を深め、先生方の意見をまとめて指導方針を立てるようになる。
- ※ なぜ、協議方式をとるか・・・担任として指導する場合に、自分一人の考えで指導するより、関係する先生方の協議によって決められた指導方針に沿って指導する方が心にゆとりを持つことができるということ。他の先生方も子どもをよく知り協力的になること。行き詰っても相談しながら指導ができるからである。

協力し理解を深める

○指導を実践すること

- ① 教師の働きかけ、子供の反応、行動の変化を具体的にメモする。
- ② 指導過程における記録が、指導の効果の判定になり、さらに次の指導の参考になる。
- ※指導結果を決定する最大の要因は、教師の指導にたいして子どもが「どう感じたか」「どう受け止めたか」という認知の仕方にある。この認知の仕方はひとりひとり異なっているが、効果的な指導とは、その子が素直に受け止めたときであり、指導効果がないということは、否定的、反抗的に受け止められた時である。

記録し整理すること

○指導を反省、整理すること

- ① 問題に対する理解は正しかったか、理解のための資料は適切であったか反省する。
- ② 先生に自分の気持ちがわかってもらえている。友達に暖かく受け入れられているという感じを持たせるような指導ができたか反省する。
- ③ 学校に来て張り合いがある。楽しいと感じさせるような指導ができたか反省する。
- ④ 子どもの現在の状況を観察し、変容を確かめることができる。

結果の考察

※問題を正しく理解し、気づかせる援助が担任の行う教育相談である。

(5) 支援シートの作成

現在、不登校や不登校気味な子、また気になる子どもたちは、何が原因でそのようなことになっているのかわからない状況になっている。そこで、この子ども達のこれからの指導に必要なようになってくるのが学級での様子や学業面、心理面などの具体的な事柄を示す支援シートの作成である。これらのシートには、項目を五つに分け、作成していく。一つ目は、身体的・生理的な面、二つ目は、知的・学業的な面、三つ目は、性格・情緒的な面、四つ目は、環境的な面、五つ目は、学級で満足しているかを調べるためのQ-Uアンケートである。

以上の内容をほとんど満たしているシートに、岩隈・田村式援助シート⁽⁴⁾がある。このシートには、子どものよさも引き出しながら、今までにやった援助やこれからの援助、またこの子どもに関わるサポートチームのメンバーが援助することなどを書き込んでいくシートになっている。

また、子どものサポートということでの学校での友だち関係や学校の先生方、地域の援助できる人などのシートもある。

これらを使い、担任、学校の先生方、保護者、地域の人たちを取り巻くサポートチームを形成して、個への対応が必要になってきているのではないかと考える。また、沖縄県教育委員会が作成した支援シートも同様の項目を作り、作成されたシートが学校現場で使用されている。

3 よりよい人間関係づくり

よりよい人間関係とは、人は、それぞれに個性をもっている。集団の中で個々が自分自身のことを理解し(自己理解)、長所や短所も受け入れること(自己受容)によって他者への理解が生まれ(他者理解)、お互いが思いやりの心を持って接することができる状態と捉える。

⁽⁴⁾ 子どもについての情報を整理し、それをもとに援助方針や援助案を立てるためのシートである

(1) 児童と児童

子ども達は「自分のありのままを受け入れたい(自己受容)」、「自分の可能性を最大限に発揮したい(自己実現の欲求)」と願っている。しかし、これらの欲求は、集団の中で所属感を味わい、自分のことを認められて、はじめて満たされるものである。そのためには、子ども達は相互に満たしあえる人間関係を体験する必要がある。

このようにお互いがよさを認め合い、集団の一員として協力し合える人間関係を育むためには、友だちのよさを受け入れ(他者理解)、自分を安心して表現すること(自己開示)により、お互いの信頼感を築けるようにすることが大切になってくる。

(2) 教師と児童

児童との人間関係が形成できていないと、児童は教師の指導や援助の一面だけを見て教師をとらえて行動するようになるということである。つまり、児童との人間関係を築いていないと、指導と援助を統合としたリーダーシップを発揮することができない。

そのためには、意識的に全員に毎日声をかけたり、児童一人一人の声に耳を傾けることが大切であり(受容的な態度、共感的・支持的な態度)、ちょっとした担任の気配りも必要である。

また、機会あるごとに自己開示して、自分の経験したことや一人の人間としての素直な思いを伝えることも大切である。こうした積み重ねから、子どもたちは教師に親近感を持つようになり、よりよい関係がつけられるのである。

(3) Q-Uアンケートについて

Q-Uは、学級の実態を把握するためのアンケートである。二つの質問紙と4点尺度法、自由記述からのアンケートから構成されている。質問紙の1つは「いごちのよいアンケート：学級満足度尺度」、もう一つは「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート：学校生活意欲尺度」である。

学級満足度尺度の結果から、次の三つの情報を読み取ることができる。

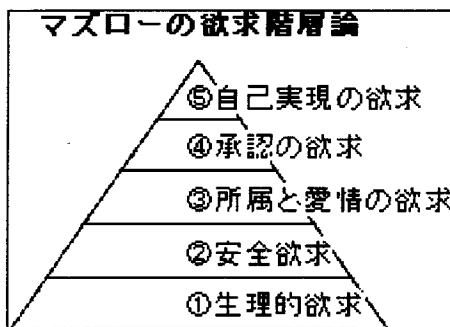
- ①個人の心的内面・・・それぞれの子どもが四つの群のどこにいるかから、学級への満足感を把握できる。
- ②学級の集団としての状態・・・子どもたちが四つの群のどのよう分布しているのかから、学級状態を把握できる。
- ③学級における子どもの関係・・・学級のリーダー、気になる子、私的なグループなど、教師の持っている情報を加えていろいろな視点から分布を見ることにより、日常観察だけでは把握できない人間関係や、子どもと学級との関係がみえてくる。

これらをもとに、学級での状態や個々の学級内における状態を多面的に実態把握ができる。その結果から、実施するエクササイズを選んで、個別の子どものケアを考える目安になるものである。

●学級満足度尺度

子どもが学級にどのくらい満足しているかを測る尺度。承認得点と被侵害得点の2つを組み合わせ測定する。承認得点は、学級の中で自分が認められているという思いを測る。また、被侵害得点は、学級の中でいじめや悪ふざけなどを受けているという思いを測る。

理論的背景



欲求〔安全と安定欲求〕が生じ、これも充足されると第三の欲求へと進んでいく。つまり、上位の欲求は下位の欲求がたとえ部分的にせよ満たされて発生すると考えた。

Q-Uは、マズローの説を参考にして、X軸に

マズローは、人間は第一の欲求〔生理的欲求〕が満たされると、次に第二の

「安全」を、Y軸には「承認」を見るように設定している。そして、二つの重なりで学級の子どもを4群に分けている。

4群について

侵害行為認知群	学級生活満足群
学級生活不満足群	非承認群

○学級生活満足群

いじめや悪ふざけを受けている可能性が低く、学級の中に自分の居場所があり、なお且つ自己の存在感を感じている子どもたちである。(承認得点が高く、被侵害得点が低い。)

○侵害行為認知群

自主的に活動しているが少し自己中心的で、ほかの子とトラブルを起こしている可能性が高い子どもたちである。(承認得点と被侵害得点が高い。)

○非承認群

いじめや悪ふざけを受けている可能性が低いですが、認められることが少なく、自主的に活動することが少ない子どもたちである。(承認得点と被侵害得点が低い。)

○学級生活不満足群

いじめや悪ふざけを受けている可能性が高く、学級の中に自分の居場所が見出せない子どもたちである。(承認得点が低く被侵害得点が高い。)

●学校生活意欲尺度

「友人との関係」「学級との関係」「学習意欲」など、子どもが学校生活のどの場面について、特に意欲をもっているかを把握し、子どもへのケアやSGEを行うことによつて問題の早期発見や不適応などの予防に役立てることができる。

4 構成的グループエンカウンターとソーシャルスキル教育について

(1) 構成的グループエンカウンターとは構成的グループエンカウンター (Structured Group Encounter = 以下SGEと略す) は、國分康孝氏が1970年代半ばにわが国に紹介・普及した技法である。

気心が通じる相手とのふれあい（リレーション＝互いに相手の立場を尊重した肯定的な感情否定的な感情交流ができる関係）のある人間関係は、快適な生活を送る上での重要な条件であり、そのこと自体が生きる目的となる。SGEは、それを模擬的に体験することで、生きる力と意欲・技術を身につけることができるものである。つまり、人とかかわる喜びや集団体験の喜びを体験し、それを元に、生きる力や意欲を持ち、技術を身につけるためのもので、「ホンネとホンネのふれあいによる人間関係のグループを活用して体験する方法」である。

（2） SGEの基本的な流れ

①インストラクション

これから取り組む活動の目的や方法を知る。

②ウォーミングアップ

メンバーの緊張を緩和したり、その後のエクササイズの意欲を喚起する。

③エクササイズ

心理的成長を意図として作られたグループ体験活動。

※エクササイズの目的には、次のようなことがあげられる。

「自己理解」「他者理解」「自己受容」「自己表現・自己主張」「感受性の促進」「信頼体験」

④シェアリング

グループ体験を通して得た感情や思いを、自分の中で、そして他のメンバーと分かち合うことを通して、意識化する。

（3） ソーシャルスキル教育について

ソーシャルスキル教育とは

良好な人間関係を形成し、それを維持していくために必要な知識を持っていて、人間関係に関する具体的なコツや技術を身につけること。心理学では、このような、人間関係に関する知識と具体的な技術やコツを総称して、ソーシャルスキル（social skills）と呼んでいる。つまり、友だちとの関係が良好な子どもは、ソーシャルスキルを適切に発揮しているということになる。ソーシャルスキルの「ソー

シャル」は、「対人的なこと」あるいは「人間関係に関すること」を意味し、「スキル」は、知識や経験に裏打ちされた技術、技能を意味する。

ソーシャルスキルを発揮するには、

①その場の状況や相手の状態を的確に読み取り、判断する。

②その対人状況の中で何をめざすべきか対人目標を決定する。

③対人目標の達成のためには、いかに反対すべきか対人反応を決定する。

④対人反応を的確に実行するために感情をコントロールする。

⑤自分の考えや感情を言語行動（言葉）、非言語行動（手振り・身振りなど）を用いて相手に伝える。

これらの各過程には、人間関係に関するルールや過去経験などの認知的機能が作用していると考えられる。

（4） ソーシャルスキル⁽⁵⁾の流れ

①インストラクション

言語的教示のことであり、言葉によって教えることであり、子どもたちへ動機付けることである。

②モデリング

教えようとするスキルのモデルを示し、それを観察させ、模倣させることである。

③リハーサル

インストラクションやモデリングで示した適切なスキルを、子どもの頭の中、あるいは実際の行動で何回も繰り返し反復させることである。

④フィードバック

子どもがインストラクションに従って実行した行動やモデリングやリハーサルで示した行動に対して、適切である場合にはほめ、不適切な場合には修正を加えることである。

⁽⁵⁾ 「心の教育」を行う方法としてサイコエジュケーションがある。その中のSGEと同じように重要視されているスキル訓練である。

(5) ソーシャルスキルの種類 (12項目)

- あいさつ
- 自己紹介
- 上手な聴き方
- 質問する
- 仲間の誘い方
- 仲間の入り方
- 暖かい言葉かけ
- 気持ちをわかってはたらきかける
- やさしい頼み方
- 上手な断り方
- 自分を大切にす
- トラブルの解決策を考える

VI 構成的グループエンカウンターとソーシャルスキルの実践

1 児童の実態

学級での人間関係作りについての児童の実態を把握するために、Q-Uアンケート(学級満足度アンケート)とソーシャルスキル尺度を行った。

○Q-Uアンケートでは

表1 学級生活満足度尺度の結果(5月実施)

侵害行為認知群 学級—11% (4人) 全国—15%	学級生活満足群 学級—43% (15人) 全国—40%
学級生活不満足群 学級—13% (5人) 全国—25%	非承認群 学級—33% (12人) 全国—20%

(結果と考察)

表1の学級生活満足度尺度の結果から分かることは、全体として、学級生活満足群に属する児童がやや多く、多くの児童がのびのびと生活していると考えられる。学級のみんなから認められていないと感じている非承認群の児童の12人は、学習面の問題のない児童10人、問題のある児童2人に分けられる。そこで、学級への所属感を高め、お互いを認め合う場面設定を工夫したい。学級内で孤立し、友人からのサポートも得られずにいると感じている学級生活不満足群のなかで一人は、「失敗した時に、はげま

してくれる人がいない」や「自分の気持ちをわかってくれる人がいない」の承認得点が低く、「からかわれたり、つらい思いをすることがある」の質問では、被侵害得点が高い結果が得られた。

また、「クラスの人がいろいろな活動に取り組もうとする人がたくさんいると思いますか」の質問では、高い数値を示したが、「クラスの人に自分の趣味や各活動などで認められることがありますか」の質問では、低い数値となった。

学習面、生活面で特に問題はないが、学級の仲間に自分のことを知ってもらいたい、認めてもらいたいと多くの児童が願っていることが分かった。

○ソーシャルスキル尺度では

表2 ソーシャルスキル尺度の結果

	配慮の得点	かかわりの得点
クラス平均点	53.7	32.4
クラススキルレベル	D	D

(結果と考察)

配慮のスキル得点とかかわりのスキル得点共にやや低い結果になった。配慮のスキルの質問項目で低かったのが「友だち同士でいて腹がたっても『カッター』とした態度を取らないでいますか。」が2.5点(4点中)であった。また、かかわりのスキルの項目では、「みんなのためになることは、自分で見つけて実行できますか。」が2.5点(4点中)であった。

日頃、友だちやクラスの仲間に自己の許容することができず、また、基本的な聴く学習訓練ができていない子が多いために、低い結果になったのであろうと推測される。このことからソーシャルスキルを高めるための工夫を授業に取り入れていきたい。

また、本学級では、不登校児童一人、休みがちな児童が二人おり、この気になる児童の居場所づくりも必要であると考えられる。

してする。やってみて、気づいたことから新しいルール作りをクラスで決める。ペアを変えてもう一度する。)

児童の感想から

- きき方が正しいと相手の気持ちもよくなるのがわかった。
- 今日の授業はとても楽しかった。友達のSさんは、ちゃんときいて、話しがしやすかった。
- 上手なきき方がわかった。はなしていてちゃんときいていたから、すごきはなしたくなった。
- 友だちやクラスの人と話すのがとっても楽しくなってきた。

Ⅶ 授業実践

学級活動指導案

平成15年9月12日(金) 3校時

志真志小学校 5年2組

男子17名 女子21名 計38名

授業者 島袋 伸

1 題材名「いいとこさがし」

2 題材設定の理由

(1) 題材について

子どもたちは、自分の短所には気づいているが意外と長所に気づいていない子が多い。そのため、自分自身に自信をなくして日々生活している子もいる。そこで、お互いをほめたりほめられたりする活動の場を設定することによって、自分のよさに気づくことができると考える。また、級友から自分のよさを認められることによって、学級に自分の居場所があることを実感し、これからの学校生活につなげていけると考え「いいとこさがし」のエクササイズを取り入れることにした。

このエクササイズは、他者から自己の「よさ」を見つけてもらうことにより、自己の未知の部分に気づき、自己理解を深めるためのものである。また、友達の「よさ」を認め合う体験活動を通して、学級の信頼感と友情を育て、他者を肯定的に受け入れていこうとする支持的、受容的な学級雰囲気形成されると考える。

(2) 指導について

構成的グループエンカウンター (S t r u

ctured Group Encounter =以下SGEと略す) は、國分康孝氏が1970年代半ばにわが国に紹介・普及した技法である。

気心が通じる相手とのふれあいのある人間関係は、快適な生活を送る上での重要な条件であり、そのこと自体が生きる目的となる。SGEは、それを模擬的に体験することで、生きる力と意欲・技術を身につけることができるものである。つまり、人とかかわる喜びや集団体験の喜びを体験し、それを元に、生きる力や意欲を持ち、技術を身につけるためのものである。

児童は、これまでに「団結くずし」や「質問ジャンケン」などのエクササイズを通して、友だちと協力することの大切さや多くのクラスの仲間とも話したいと願っている。しかし、実際、学級の仲間と話しをしているのは決まった友達同士である。そこで、この授業で話し合うグループをくじ引きで決めることによって、日頃、話をしていない子ども同士の交流の活動の幅が広がると考える。このような機会を設けることによって、新しい仲間との出会いを大切にし、また、お互いの良さを認め合う体験活動をすることによって、学級の仲間への信頼感を育てることができると考える。

3 ねらい

- ①友達のよさを発見し、よさを素直に認め、ほめることができる。
- ②友達がみつけた自分のよさを知り、受容されることの喜びを味わい、自己肯定感を高めることができる。

4 授業仮説

- ①グループ活動やシールを使った評価の活動の場で、友達のよさに気づかせることによって、他者理解ができるであろう。
- ②シェアリングの場で、自己理解や他者理解を深めることによって、クラスへの帰属意識や仲間への信頼感が育つであろう。

2 指導計画

二つのアンケートの結果から、本学級児童の気持ちの大部分は、「自分のことを知ってほしいし、認めてほしい。」と願っている。しかし、他人には認めてほしいが友達への配慮の部分が低いために、お互いに認めることができないでいることがわかった。そこで、最初によりよい人間関係作りのために、友達の話はひやかさないで真剣に聴くことなどの学級でのルール of 定着を図り、次に、自己理解や他者理解の活動の場面を設定し、お互いの認め合える機会をふやしていきたいと考え表3のとおり指導計画を作成した。

表3 指導計画表

	題材名	ねらい
1	団結くずし	学級への所属感を高める。
2	質問ジャンケン	お互いを認め合う。
3	元気のでる聴き方	気持ちのいい聴き方。
4	いいとこさがし	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自他理解 ・ 自己肯定感 ・ 学級の雰囲気作り

3 これまでの授業内容と感想

(児童の感想より)

☆エクササイズ1 団結くずし

(活動内容：例えば、男子がひとつのグループになり、足を前に投げ出し、マットの中央に背中合わせに腕組をして座る。団結しているグループ以外の人を足を取り、引っ張り出す。攻守やグループを変えて繰り返す。)

児童の感想から

- 始めているんなゲームをして、きつかったし、手、足がいたかったけど、みんなと協力して、とてもよかった。
- 団結くずしの時、ひっぱられて、いたかったけど、となりの人がたすけてくれてうれしかった。
- チームワークが大切だと思った。
- いろいろな人とてをつないだで、さらに仲良くなった。
- ふだんはなしてない人とはなせた。
- クラスのみみんなと仲良くできてよかったです。

☆エクササイズ2 質問ジャンケン

(活動内容：二人組みでジャンケンをする。勝った人は相手に一つ質問する。負けた人は質問に答える。ただし、答えたくない時やわからない時は、その旨を言って答えない。数人の相手とやり、知ったことを全体の場で発表する。)

児童の感想から

- T君の好きな動物や食べ物がよく分かって、自分は、あんまり好きではないのにこんな動物や食べ物が好きなんて、人はそれぞれ好みがちがうことが分かった。
- 自分のきれいな物がその人(となりにいる人)が好きだったり、同じ色が好きだったり、SさんとHさんの知らないところが少し分かった。
- Hさんのとくぎがピアノと知って、私は音楽がきれいだからすごいなあとと思った。
- Yさんとは、あまりしゃべったことがなかったけど、たくさん質問をして、その人の事がよくわかった。
- ぼくが食べられない物があったけど、他の人はたべられてすごいと思った。

☆エクササイズ3 (基本スキル)

元気のでる聴き方

(活動内容：例文から返事が返ってくるだけでも元気が出ることを知り、教師が良い聴き方と悪い聴き方を見せる。二人一組になり、ルールに気をつけてリハーサルを行なう。交代

5 本時の展開

学習活動	発問・子どもの心の動き	教師の支援と指導上の留意点
イ 1 グループ決めをす ン ー (くじで行なう) ス 2 めあてやエクササイ ト ズの確認 ラ ク 3 友達のよさをグル シ ープでさがす ョ ン (10分)	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">偶然の出会いを大切に。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どきどきだな。 <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">友だちのいいとこさがしをします。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">違うグループのカードを渡しますから、友達のいいところを見つけたらどんどん書き込んでいきます。1人2分です。1枚目のカードを机においてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんは字がきれい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい出会いを大切にすることを指導する。 ・リーダーは、グループの中で誕生日の早い人に決める。 ・めあての確認 ○いいとこを素直にほめる。 ○友だちの話を聴いてあげる ・合図を守る。 ・説明を終わってから質問を受ける。 ・みつけきれないグループには、あらかじめヒントを用意しておく。 ・話し合いができないでいるグループには、お互いの良さを見つける活動を個別に行う。
エ 4 リーダーがまわり ク の机の上にカード サ おき、自分のを探し サ 読む	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">リーダーはカードを周りの机においてください。自分のカードを見つけて読んでください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のことをほめてくれてうれしいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のカードを探るときは、静かに探す。(自己の良さを見つめ直すことをさせたい。)
イ 5 友達のいいところ ス に同感だと思ったら、ワークシートにシールを貼る	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">次は、友達のいいところ探検です。友達のいいところを読んで自分もそうだと思ったら、シールを貼ってください。全員のを見終わってから、自分のカードを取ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私も〇〇さんは、やさしいと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分と同感だと思ったら、シールを貼っていく。 ・前の人を追い抜いてもいいことにする。
シ 6 感想を発表する	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">今日の活動で自分や友達のいいとこを探して感じたこと、考えたこと、学んだこと、気づいたことを発表して下さい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・時間がなく、シールを貼れなかった児童には、教室で貼ってもいいことにする。
エ 7 先生の話 ア リ ン 8 自己評価 グ (ワークシートに記入する)	<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">自分のいいところを見つけてもらうことはうれしいことですね。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・シールの多さにこだわるのではなく、自分はこんなにいいところがあったことに対して視点をおくことを指導する。 ・大きな輪になる。

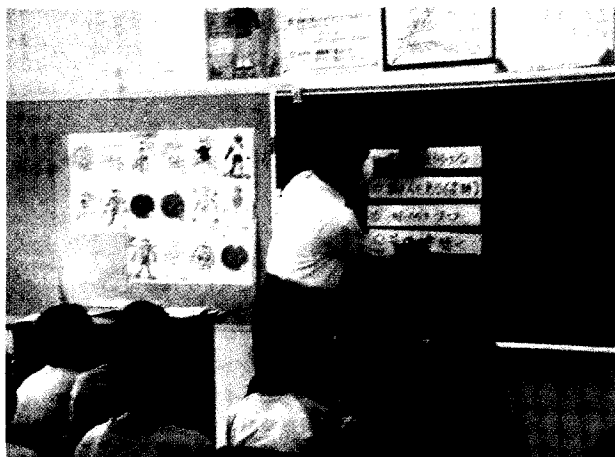
6 評価

- ① 友達のよさを発見し、よさを素直に認め、ほめることができたか。(評価の方法：ワークシート・シールでの評価活動)
- ② 友達が見つけた自分のよさを知り、受容されることの喜びを味わい、自己肯定感を高めることができたか。(評価の方法：発表・ワークシート)

Ⅶ 結果と考察

1 授業の流れ

- ・導入・・・これまでの学習で「上手な聞き方」を思い出させ、授業での聴き方を確認した。偶然の出会いを大切にということで9グループの編成をくじで行なった。



(1) 授業仮説①の検証 (グループ活動の場面において)

T：リーダーは、違うグループのリーダーとカードを交換してください。カードを机におき、友だちのいいところを見つけたらどんどん書き込んでいきます。1人2分間です。先生の始めの合図でカードの人の名前を全員で呼んでから始めてください。(以下：5回繰り返した。)

グループの中での会話

C1：〇〇さん。うーん、やさしい。

C2：リレーのときがんばっている。

C3：正直。

C4：努力している。

など、1人に対してどのグループも四つ以上記入されていた。

また、いいところが見つからない児童の場合には、教師が事前に調べていたことを気づきのヒントとして与えた。



〈考察〉

一人2分間という短い時間であったが、児童達はグループのメンバーと話し合いながら探していた。友達と話し合うことによって、日頃、話をしていない人のいいところを見つけることができたと思う。しかし、よさを見つけにくい級友もいた。その児童への関心が低いことからだと考えられる。

(2) 授業仮説①の検証

(自分のカードを見る場面において)

リーダーがグループのものを周りの机にカードを置いてくる。

T：自分のカードが気になる人？

C：はい(ほとんどの子どもが手を挙げている。)

C：でーじ気になる。

T：うーん、だめ(じらしている。)

C：見せてー。

T：なんで見たいのー。

C：なんて書いているか気になるから。

T：そうか。よし、時間を3分間あげるから、自分のカードをさがして見て良いですよ。ただし、声を出さないこと。

※友達から自己のよさを見つけたことへの感謝の気持ちも考えながら、自分のカードを見る時間を与えた。



〈考察〉

やはり、自分が友だちからどういう風に見られているのか気になるには当然のことである。したがって、ここで焦らしたりすることによって、自己のよさに気づかせたかった。子ども達は、自分のカードを見て席に戻るときには、笑顔でニコニコしながら席につくことができたので、自分のよさに気づくこと（自己理解）ができたのではないかと考える。

（3）授業仮説①の検証

（友達のいいところ探検の場面において）

T：友だちのいいところ探検をします。

自分のいいところを見つけてくれた友達に感謝しながら、また、自分も同感だと思うところにシールを貼ります。

（中略）

C：何個でもはっていいんですか？

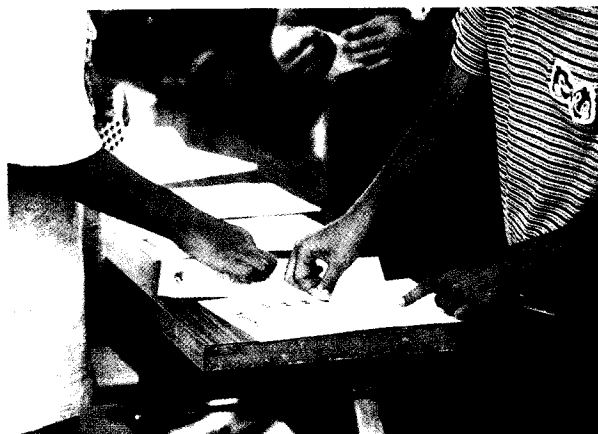
T：はい、自分もそう思うものには、どんどん貼ってほめてあげよう。

（中略）

T：はい、時間です。席に戻ってください。

C：あーあ、もっと貼りたかったのに。

T：時間ですので、まだの人は教室で貼ってあげてください。



〈考察〉

友だちのいいところにシールを貼っていくことによって、他者理解につながると考え、この活動を取り入れた。児童達は、自己理解ができたことにより、級友のいいところを素直に受け入れ、シールを通して他者理解も深めることができたのではないかと考える。

（4）授業仮説②の検証

（シェアリングの場面において）

自分のカードを取り、教室の前のほうに集まり、円を作ってイスに座った。

T：今日は、偶然にできた出会いから、友だちに自分のいいところを探してもらい、次に友だちのいいところ探検をしました。今日の活動を振り返って、自分の気持ちを発表してください。

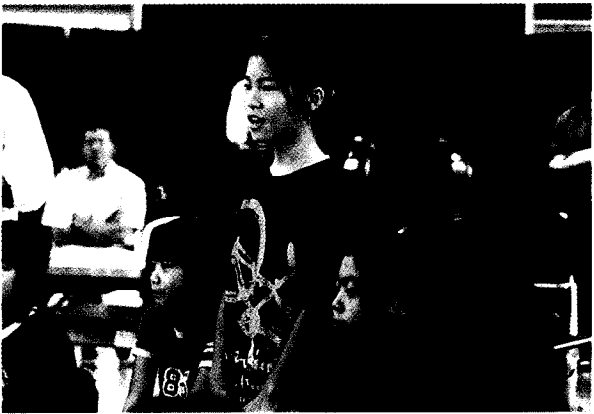
C：はい、友だちに自分のいいところを見つけてもらって、うれしかった。

〈拍手〉発表した友達への賞賛があった。

T：うれしかったんだね。よかったね。ありがとう。同じように、うれしかった人はいますか？

C：はい（クラスの半数以上が手を挙げた。）

C：友だちのいいところは、たくさんあるんだなあーと思いました。これからも、友だちのいいところをさがしていきたいと思いました。

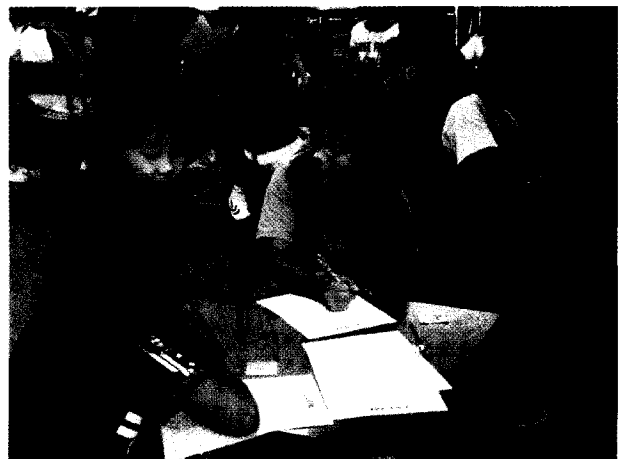


〈考察〉

授業後の自己振り返りシートより、「私は、最初シールをつける前の時、自分のいいところが五つもあってとてもうれしかったです。シールがはってあったときは、とてもうれしかったです。私のいいところを見つけてくれた人に『ありがとう』といいたいです。」とあった。また、「友だちのいいところを見つけて生きたい。」や「あまり自分で思っていなかったこともカードに書いていました。私は相手がこんなことを思っているんだなと思いました。」などの気づきが読みとれた。ほとんどの児童が自己の活動の振り返りをしているが、シェアリングの場での発表がほとんどなく、お互いにその場で分かち合うことができなかった。これは、教師の発問が自己理解の部分と他者理解の部分の両方だったので、子ども達はどちらを発表していいのか迷ったのではないかと考える。これからは、焦点化した発問の工夫と発表者への配慮の仕方など、リーダーとしての技能の向上が大切であると感じた。

2 児童の感想から

- 自分のいいところに絵が上手ということが多かったので、もっと上手になりたいと思った。
- シールをはっていた人がいたのでうれしかった。誰がはったのか知りたい。
- 三つも、私のいいところを見つけてくれた友達にこれからも、もっと、大切にしていきたいと思います。
- 自分のいいところを見つけられて、これからもそれを守って生きたいです。
- 私はこの授業をして、自分はこんなだったんだなあーと自分のことを知りました。
- 自分が気づいていないいいところがあった。はじめてわかった。



3 授業研究会の記録（石川正信指導主事）

[成果]

- 授業を通して、児童は、自分を見る目が変わり、他人のよさに気づき、新しい発見があったと思う。（石川指導主事）
- 授業の雰囲気がよく、子ども達の表情がとてもよかった。（石川指導主事）
- 授業の途中でも「今日のめあて」や「決まり」の確認を行なっているので授業で子ども達が脱線することがなくてよかった。
- 導入場面での演出がとてもよかった。それで今日の授業に対する子ども達のモチベーションが高まっていった。
- 不登校気味の子への対応やシールの少ない子への配慮も良かったと思う。

[課題]

- ・教師が自ずとほめていけば、友達同士にもほめることが増えていくのではないかと。（石川指導主事）
- ・今日の授業の中で、教師自身がもっと子ども達をほめてあげるのもいい。例えば、グループでの声がそろったときにほめるなどのほめ方の工夫がほしかった。（石川指導主事）
- ・グループの場の設定がよかったが、ここから「心の居場所」へとつなげることを課題にしてほしい。（石川指導主事）
- ・教師の指示が分かりにくかったところがあった。
- ・時間がかかりすぎたが、まとめの所では、その場の雰囲気があるのでふりかえりシートを書いてから発表がよかったのではないかと。

4 検証授業後のQ-Uアンケートと

学級生活意欲尺度の結果

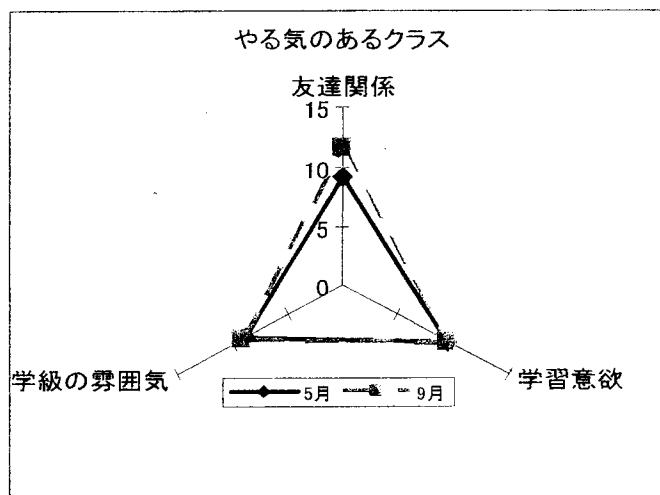
表4 学級満足度尺度の結果（9月実施）

侵害行為認知群		学級生活満足群	
5月	11% 4人	5月	43% 15人
9月	3% 1人	9月	73% 28人
学級生活不満足群		非承認群	
5月	13% 5人	5月	33% 12人
9月	11% 4人	9月	11% 4人

〈考察〉

事前と事後の結果を比較すると、特に学級生活満足群が43%から73%に増え、非承認群が33%から11%に減った。また、侵害行為認知群は11%から3%に減り、学級生活不満足群も11%に減った。この事から、お互いに認め合うことで自己肯定感を持てるようになり、学級生活を楽しむことができる児童が増えたことが分かる。

しかし、学級不満足群は減少しているものの非承認群から移ってきた児童や数値的に不満足の結果が上がっている児童のケアが今後必要である。



グラフ1 学級生活意欲尺度アンケート

〈考察〉

5月と9月を比べて2領域（学級の雰囲気、友達関係）共に上がっている。特に、友達関係では、2.5ポイントも上がっている。よりよい人間関係作りができつつあると考える。

しかし、友達関係作りの質問項目の中の「クラスの人から好かれている、仲間だと思われていると思いますか。」で1ポイントの児童へのエクササイズを考えたSGEの実践が必要である。

Ⅷ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) SGEを行なうことによって、教師と児童のリレーションが良くなった。また、児童同士のリレーションもよくなり、児童一人一人が学級での居場所を持つことができるようになった。
- (2) SGEの実践を通して、自己理解することによって、他者理解が可能となり、よりよい人間関係作りができるようになった。
- (3) 不登校を予防するためには、自己の存在感や自己肯定感を高めるための予防的学級経営が必要だと分かった。また、SGEは、学校復帰のための学級づくりにも活用でき、治療的学級経営の手法としても有効である。

2 今後の課題

- (1) SGEを取り入れた学級活動や他教科との関連した年間計画を作成していきたい。
- (2) SGEを効果的に実践していくための教師のリーダーとしての技術を高めていきたい。
- (3) 不登校や不登校気味な子、また気になる子どもたちの支援シートを使い、実践をしていきたい。
- (4) 保健室登校児童などの教室復帰へのSGEの実践をしていきたい。

3 終わりに

六ヶ月間の研修があっという間に過ぎてしまいました。この研修の時間は、毎日が有意義なものでした。この時間を大切に、また、研究の成果と課題をこれからの自分自身の教育活動に生かしていきたいと思えます。

最後に研修を進めるにあたって、ご指導・ご助言を賜った中頭教育事務所指導主事の石川正信先生、当研究所所長の宮城勇孝先生、研修係長の新垣英司先生、研修の機会を進めてくださいました志真志小学校元校長の島袋直子先生を

はじめ、研修の機会を与えてくださいました志真志小学校の久銘次利男校長先生、志真志小学校の職員のみなさま、そして励まし、ささえてくれた当学習センターの職員の皆様、同研究教員の西俣尚志先生、伊禮聡先生に深く感謝申し上げます。

〈主な引用文献・参考文献〉

- ・ 國分康孝監修 岡田弘編集
『エンカウンターで学級が変わる』図書文化、1996。
- ・ 松原達哉編著
『学校・学級不適應に対応するカウンセリング』学事出版、2000pp26—32。
- ・ 河村茂雄編著
『グループ体験による学級育成プログラム』図書文化、2001。
- ・ 岩隅利紀・田村節子著
『チーム援助入門』図書文化、2003。
- ・ 諸富祥彦著
『学校現場で使えるカウンセリング・テクニク』(上・下)誠信書房、1999。
- ・ 全国教育研究所連盟編
『学級担任による教育相談の展開』東洋館出版社、1997。
- ・ 河村茂雄編
『学級経営コンサルテーション・ガイド』図書文化、2001。
- ・ 高橋史朗編
『癒しの教育相談理論「ホリスティックな臨床教育学」』明治図書、1997。
- ・ 國分康孝編集
『学級担任のための育てるカウンセリング集』図書文化、1998。
- ・ 文部科学省 (2003)
「今後の不登校の対応の在り方について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/houdou/index.htm
- ・ 國分康孝監修 小林正幸 相川充編著
『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる』図書文化、1999。

苦戦していること ()

児童生徒氏名		知的能力・学習面	言語・運動面	心理・社会面	健康面	生活面・進路面
担任氏名		(知能・学力) (学習状況) (学習スタイル) など	(ことばの理解や表現) (上下肢の運動) など	(情緒面) (人間関係) (ストレス対処スタイル) など	(健康状況) (聴覚・視覚の問題) など	(身辺自立) (得意なことや趣味) (将来の夢や計画) など
情報のまとめ	(A) いいところ 子どもの自助資源					
	(B) 気になるところ 援助が必要なところ					
	(C) してみたこと 今まで行った、あるいは 今行っている援助と、その結果					
援助方針	(D) この時点での 目標と援助方針					
援助案	(E) これからの援助 で何を行うか					
	(F) 誰が行うか					
	(G) いつから いつまで行うか					

参照: 石隈利紀・田村節子共著『石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門-学校心理学・実践編-』図書文化社
 石隈利紀著『学校心理学-教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス-』誠信書房 (c) Ishikumra & Tamura 1997-2003